

を用いないし、仙台での三幅一対で歌うのに対して、会津では二つが一対である。歌詞も仙台では「萱野の雨か」と歌うが、会津では「萱屋の雨」となっていると、その相異点を較べてみている。歌詞の点では、会津では「萱野の雨か」と歌っている人も多いようである。

既に菅井真澄の「ひなの一ふし」の中に、奥州膽沢の衣川の「こなたかなたの祝言唄」に、
さんさ時雨と萱野のあめは、

音もせできて降りかかる

とあるから、縁由伝承に文句をつけてみても始まらないが、恐らくこれらは、みなあとについた付会伝承で、ともに立派な男女の結びつきを歌いこめた、古くからの信仰的な歌であろうと思う。陰旋法の名曲として、目出度い婚礼の結びに歌いつづけるのがよいようである。

2、玄如節 さんさ時雨が祝歌としての地盤を確固として維持しているのに、会津の名曲といわれる玄如節は影が薄くなり始めている。会津では最近まで会津高田町赤留出身で、民謡、特に玄如節に愛惜をもった名人の内磐水がいたが、その師匠の荒木源次郎は古麻生出身で、会津民謡会長を勤め、その普及に献身した。大正十三年正月七日逝去されて、その墓が如意山円満寺の裏にある。

玄如見たさに朝水汲めば

姿かくしの霧が降る

というのが元歌のようになっており、昔、東山の天寧寺に玄如という美貌の小姓がいて、村の乙女たちが恋い慕って歌ったのに起るといわれているが、古く津軽波岡の草刈ぶしにげんじよなる名が出ており、決して新しい歌ではなく、何か日本民族の玄如信仰というようなものになり、男女を結びつける歌かがい、歌がきなどに関聯し